

## 楼門

摂社拝殿(p. XX),と同様、1318 年に建てられたこの色あせた木造の門は、かつて仏教と神道の上に深いつながりがあったことを想起させる。仏教寺院によく見られるタイプの楼門で、大きな鐘は時を刻み、僧侶を食事や祈祷に呼ぶために使われる。この門が神社の真ん中にあることは、神道と仏教が同じ境内に一緒に存在していた時代を思わせる。

1868 年、仏教と神道は正式に分離され、鐘は取り外され、売却されてしまった。現在、鐘はないが、この楼門は「四脚門」と呼ばれる門の良い例で、軒下には複雑な二段の木組みがあり、屋根は檜板葺きである。

上層部の木製プレートには、4 つの漢字が刻まれており、その組み合わせの意味するところは「計り知れないほど古いが、なお新鮮なままである」である。この 4 文字は、元首相の山縣有朋（1838-1922）の直筆のものである。この字句は、日本最古の神社のひとつであり、復興と再生の場でもある石上神宮のアイデンティティを表している。